

文集「たけのこの兄」(小西健二郎氏指導)について

菅原

稔

文集「たけのこの兄」は、小西健二郎氏(一九二四^一)によって編集・発行された謄写版刷り学級文集(兵庫県氷上郡大路第二小学校、五年生・六年生二年間継続担任)である。

この文集は、昭和七年八月一九五二年七月一日から、昭和二九年八月一九五四年一月二五日の間に、九号が刊行されている。

文集「たけのこの兄」は、小西健二郎氏の実践記録「学級革命」(年)の母胎となったものであり、農村部における高学年文集の一つの典型とみることができる。

本稿では、この文集「たけのこの兄」を対象とし、内容・特質を考察するとともに、そこに掲載されている児童作文のありようを明らかにしたい。

二

小西健二郎氏は、文集「たけのこの兄」の第一号(昭和二七年八月一九五二年七月一日刊)の扉に、「みんなで考えよう」と題する、次のような詩を掲げている。

みんなできたよ、

「たけのこの兄」が、

みんなの生まれてはじめての文集だね。

田植え休みに力いっぱい手伝って、

夜ねむい目をこすりながら書いた、

みんなの日記だよ。

泥足のまま板間で書いた、

みんなの詩だよ。

みんな読もう、しっかり読もう。

この文、この日記の中に、

この詩の中に、

みんなの大切な問題がある。

はてな?と考えねばならぬことがある。

字が違っている、文が下手、

そうだけれどもある。

けれど、

もっともっと大切なことがある。

みんなでそれを考えよう。

みんな読もう。

ここに、小西健二郎氏が、文集「たけのこの兄」を中心とした教育実践によって、何をめざそうとしたかをみる事ができる。

小西健二郎氏は、文集「たけのこの兄」によって、児童におたがいの生活や思考・認識を知らせあい、また、その中にある問題に目を向け、考えさせようとするのである。

ここにおける「日記」「詩」は、「大切な問題」や「大切なこと」を知り、考えるために書かれるものであり、生活指導のための表現指導の立場にあるものといえる。したがって、「字が違っている」ことや「文が下手」であることなどだけをとりあげて問題とはしない。表記上・表現上の誤りは、そのような誤りを生むにいたった生活そのものの持つ誤りとして、生活指導上の問題として、とらえられるのである。

小西健二郎氏が、このような立場から、必ずしも書くことを喜ばない「たけのこの兄」の児童たちに対してどのような指導を展開していたかは、ほぼ同じ時期に出された、兵庫作文の会の機関誌「作文運動」に、次のように述べられている。(生々)

「先生、日記は、宿題ですか。」

「かかんなんのですか。」

「いいや、かきたい者だけだよ、でもね、みんながおうちでしたこと、思ったことを書いてきてくれると、先生は、うれしいね。」

「先生、きのう、マンザイ見に行つて、かかれへんだ。」

「先生、きのう、こもりでかけへんだ。」

「いいよ、でも貞夫君は、今朝早く来て野球していたね。信之君、

ばんねるまでこもりしていたんかい、こもりのことをかいてくれたらよかったなあ。」

こんな調子であったが、最初三人、それでも赤ペンを入れてやり、「崇君がね、こんなこと書いているよ。―きのうはくは、ふるの火をもやしました。おかあちゃんが、『今日は、どうしたことや、言われんさきに火もやしたり。』というてでしたので、『きょう、がっこうで、いえのしごとをしらべておかあちゃんがーばんいそがしいから、できるだけつだいはしてあげたらよいいうてせんせいがいいうちやったださかいや。』いうたら、おかあちゃんが『そうか。』いうてわろとつてでした。ぼくはうれしかった。―どうだ、崇君はえらいね。これが本当の勉強だね。』(中略)

帰る前に紹介しながらかえしてやった。

今では、半数はかいてくるようになっていた。私は、この日記らしくない日記をみて、赤ペンで話しかけ、はげましてやり、子供たちが、かえしてもらった日記を自分の席でそつとひらいて、赤ペンを読み、につこり笑いながら、カバンに入れる姿を見るのを、一番のたのしみとし、昼食後の十分程の時間を利用して、二年生程度の、すなおに、くわしく書いた文を、よんでやっている。

これから、どうして行くのか、全く見当がつかない。しかし、この殆ど、自分というものを持っていない子供に、綴方教育の必要なことだけは、はっきりわかっている。

「たけのこの兄」の児童たちは、小西健二郎氏に担任されるまでほとんど作文指導をうけてはいなかった。このような児童に対して

「自分というものを持たせるために、文集「たけのこの兄」にいたる、「赤ペンで話しかけ、はげまして」やる日記指導が展開されるのである。ここに、『文集を作るための文集指導』としてではなく、『日記』を中心とした書くことの指導の中から必然的なものとして、『文集』が生みだされていった、「たけのこの兄」の成立過程をみる事ができる。

三

文集「たけのこの兄」全九号のうち、典型的なものとして第五号をとりあげ、その構成について、考察していきたい。第五号（昭和二八年八月一九五三年六月二〇日刊）は、次のように構成されている。

- 。詩・うれしい時かなしい時（児童詩一編）
- 。詩(1)・おかあさんほか（児童詩四編）
- ☆・美しい心（小西健二郎のことは）
- 。日記より・なつみかん・かきとり（児童文二編）
- 。生活文・下駄みがき・しばかり（児童文二編）
- ☆・ずばりという勇氣（小西健二郎氏のことは）
- 。詩(2)・白いシャツほか（児童詩九編）
- 。日記より・ふる（児童文一編）
- 。生活文・やいとすえほか（児童文三編）
- 。詩(3)・進級試験ほか（児童詩七編）
- 。信之君の詩・はたるほか（児童詩四編）

- 。生活文・牛がほしい（児童文二編）
- 。詩(4)・おしゃかさんほか（児童詩九編）
- 。おとうさんおかあさんへ・おてつだいについて（児童文三編）
- 。不公平について（児童文二編）
- 。おかねについて（児童文五編）
- 。あとがき（小西健二郎氏のことは）

この構成によって明らかのように、各一枚文集は、文章ジャンルによる類別を中心に構成され、そこに収録されている児童作文の中に、内容的な共通性を持たせようとするような配慮はみられない。小西健二郎氏の、文集を中心とした教育実践は、その文集につけられた名称によって、次のように区分することができる。

文集名		学年	期	間
？		一年生	昭25・4	昭26・3
たけのこ		一年生	昭26・4	昭27・3
たけのこの兄		五年生	昭27・4	昭28・3
		六年生	昭28・4	昭29・3
丹波の子ども		五年生	昭29・4	昭30・3
		六年生	昭30・4	昭31・3
たんばのこ		一年生	昭31・4	昭32・3
		二年生	昭32・4	昭33・3

丹波の子	五年生	昭33・4～昭34・3
	六年生	昭34・4～昭35・3
たんばのこ	一年生	昭35・4～昭36・3
	三年生	昭36・4～昭37・3
たんばの子		

小西健二郎氏によって指導されたこれらの文集のうち、昭和三一年～一九五六年√から、昭和三三年～一九五八年√にかけて刊行された、文集「たんばのこ」の特色の一つとして、子どもの生活の中の出来事（問題）をとりあげる編集方法がある。

文集「たんばのこ」第五号（昭和三二年～一九五七年√二月二八日刊）に掲載された「しんせつなこ」は、自転車に乗っていた「まさかずくん」を「えつおくん」が「とおせんぼ」をして転倒させ、けがをさせたという「出来事」をめぐるのであり、次のように構成されている。

- ①・じてんしゃといっしょにこけた。（山本まさかず）
- ②・まさかずくんごめんとうといった。（細見えつお）
- ③・だあれも、かわいそうやねえといきました。（細見じゅんこ）
- ④・四人はよい子やと思います。（細見くみこ）
- ⑤・こかしたんやったら、おくっていったげたらよいのに。（平岩ひろこ）
- ⑥・かわいそうやったけど、ようじがあつたでかえつた。（赤土よしのお・土谷かおる）

- ⑦・おくっていかんとごめんねえ。（細見みちよ）
- ⑧・わたしらはおくってあげました。（山内ともこ・山内修一・細見さなえ）

⑨・みんないこだね、ありがとう。（せんせい）

- ⑩・おくってくださった子にお礼をいって下さい。（まさかずくんのお母さん）

⑪・おとうさん、おかあさんへ。

このような、子どもの生活の中の出来事（問題）をとりあげる編集方法は、「丹波のこども」以降、「たんばのこ」などに数多くみられ、小西健二郎氏の指導された文集の大きな特色の一つといえる。しかし、第五号の構成によって明らかのように、文集「たけのこの兄」においては、このような編集方法はとられていない。

小西健二郎氏の「たけのこの兄」の児童についての実践記録「学級革命」が、『子どもの日記（作文）をもとにした話し合い』を中心としたものであることは、よく知られている。小西健二郎氏自身、「学級革命」において、この「話し合い」について、次のように述べている。³³⁾

子どもの文や話の中には、教師だけがそつと読んで、そこに書かれたことから、子どもの考え、行動を、知っておくだけでいいこともありましよう。表現・表記などを赤ペンで訂正してやるとともに、その子に励むのことは書きこみ、注意をうながすことを書き入れる時もありましよう。（中略）

それと同時に、その作品を単に教師対その子個人のものと思せず、それを学級のみんなの中へ出して、読み合い、その学級のレベルに応じた問題をとりあげて、みんなの問題として、教師をふくめてお互いに話し合い、考えを述べあひながら、お互いにおきない合い、助け合つて、たかめ合つていく作品についての「話し合い」「集団化」を大切にします。

小西健二郎氏にとって、児童作文を中心とした「話し合い」は、すでに「たけのこの兄」刊行当時から、文集を中心とした教育実践と、切りはなすことのできないものとされてきたのである。

『日記』から『文集』へ、さらに『文集』を中心とした「話し合い」によつて、「書くこと」だけではなく「書かれたもの」が、生活指導のうえにはたらくよう、心くばられているのである。

また、「たけのこの兄」掲載作文には、「みんなへ」と題する評語が添えられている。

第二号（昭和二十七年八月一九五二年九月一五日記）に掲載されている「赤土崇」の「炭木入れ」に添えられた「みんなへ」という評語は、次のように記されている。

一つのことをできるだけくわしく、その文をよんでいると、ちょうど映画をみるように、よくその時のことがわかるように、と、先生がよく言った。

崇君は、木入れの時の様子を、だいぶくわしくかいた。

よいところはどこか、もう少しというところ、よく考えてみて下

さい。

崇君は、この文のように、いつもよく手伝いしている。感心だ。

ここでは、「よいところ」「もう少しというところ」の具体的な指摘はなされていない。児童の「話し合い」による発見がまたれているのである。

また、第五号に掲載されている「細見昌義」の「やいとすえ」には、次のような評語「みんなへ」が添えられている。

- ・ どうしてやいとをすえるのか。
- ・ やいととは体のためによいだろうか。
- ・ 田舎の人と町の人は、どちらがよくやいとをすえるだろう。
- ・ それは何故だろう。
- ・ 「ついうっかりして何々した。」ということをよくいいますね。ぼくたちのくらしの中には、ずいぶんこの「ついうっかりして」が多いですね。「ついうっかりして手を切った。」これぐらいですとまだいいですが、「ついうっかりして火事になった。」「ついうっかりして汽車にしかれた。」こうなったら、もうおしまいです。「する前に考える」どんなことにも大切なことですね。「なんでもうっかりするな、する前に考えよ。」こんなことについて話合つといね。

ここでは、「やいと」および「ついうっかり」という「生き方」がとりあげられ、話しあうべきものとして、方向づけられているの

である。

話し合いにとりあげられ、生活指導に役立てられるためには、概念的ではない、児童の一人一人の個性に基づいた「ありのまま」が書かれた作文でなければならぬ。また、個人的主観的な真実のみが表現されたものではなく、話し合いの素材となるための、一般性・伝達性をそなえたものでもなければならぬ。ここに、従来の生活綴り方および生活綴り方的教育方法によって生み出された児童作文とは異なる、一つの限界を越えた作文をめざそうとする、小西健二郎氏の行き方をみる事ができる。

さらに、話し合いのための作文が書かれるためには、何でも書くことが出来、何でも話し合うことの出来る学級が必要となる。ここに、すぐれた児童作文と、「自由な、友愛に結ばれた学級」とは、必然的に結びあうものとなる。

文集「たけのこの兄」は、話し合いを前提とした編集方法はとられていないものの、一つ一つの児童作文について、綿密な話し合いがおこなわれたことがうかがえる。したがって、このような「話し合い」を切り離すことの出来ないものとして持つ文集指導を、小西健二郎氏の文集を中心とした教育実践の特色の一つとして指摘することができる。

四

文集「たけのこの兄」掲載作文一〇三編を、その取材傾向によって類別すると、下表のようになる。

もちろん、この表がそのまま児童の取材傾向を示すものではない。

社会のこと	学校のこと				家庭のこと				多	普通	少
	自然のこと	先生のこと	交友のこと	学校行事・作業のこと	健康のこと	習俗・誤案のこと	衣・食・住のこと	職業・労働・手伝いのこと			
	14.6%		18.4%					29.1%		13.6%	
				9.7%	7.8%		5.8%				
0%		1.9%				3.9%		3.9%		1.0%	

児童の日記その他から、指導者である小西健二郎氏が選択し、文集に収録しているからである。しかし、ここから、児童の取材傾向のおおよそと、小西健二郎氏が、文集「たけのこの兄」によって、何をとりあげ、話し合わせようとしたかをうかがうことは出来る。あくまで児童の日常生活の中の出来事や問題、あるいはそれらに対する考えなどが話し合いの「材料」となるのであり、児童の現実

生活から遊離した観念的なことからは、「材料」となりえないのである。

小西健二郎氏は、文集「たけのこの兄」第四号（昭和二八年八月五三年）二月一日刊）において、児童の詩を引用しながら、その教育実践のめざすものを次のように述べている。

痛ければ痛いという

小西健二郎

—さんばつしてもらった

頭をおさえつけてかられる

痛いといったら、コツンとやられる

でも痛かったら痛いといわな、しかたがない

「お父ちゃんら、下手や」といったら

「さんはつしてやりよるのに文句いうな」

と、又、コツンとやられる

でも、痛かったら痛いといわな、しかたがない—

そくだ／＼

痛かったら痛いといわな、しかたがないな

コツンとやられることがわかっていても

痛いの痛くないなんていえないな

そくだ／＼

悪いことをよいことだなんていえないな

痛ければ誰がなんといおうと

痛いといわな、しかたがない

悪いことならだれがなんといおうと
悪いことなんだよ

そくだ／＼

正しいことを正しいとい

わるいことをわるいとい

口と心と、いや体全体をつくるために

みんなや先生は勉強するのだ

そしてだれがなんといおうと

実行出来る強いたましいをつくるのだ

痛いなら痛いというんだ

コツンとやられることがわかっていてもな

正しいことは正しいと

だれがなんといおうといえるようになるんだな

ここに、小西健二郎氏が、文集「たけのこの兄」とその話し合いによってめざそうとしたものが、明確に示されている。

小西健二郎氏は、書くことによって、また書かれたものを用いた話し合いによって、児童に、自らの考えや意見・主張を持たせること、またそれらを正しく表現する能力を育てようとする。すなわち、児童の自己確立と解放とを図るために、文集「たけのこの兄」を中心とした指導がおこなわれたのである。

ここから、文集「たけのこの兄」は、単なる作品集ないし記念文集としてではなく、児童の思考・認識および生活のすべてにかかわるものとして、小西健二郎氏の教育実践の中に位置づけられていた

ということが出来よう。

五

文集「たけのこの兄」を中心とした話し合いは、そこに示された児童の思考・認識および生活についてのものではあつた。しかし、そのような生活問題解決のため」の話し合いは、作文指導の場としての機能も、あわせ持っていたということが出来る。何について、どのように考えるべきかを知らせ、また、話し合いによって思考や認識を深化・拡充させることは、一面、取材指導・表現指導……ともなっていたのである。このような、書くことを書くことと意識させない作文指導によって、逆に、すぐれた児童作文が生み出されているのである。

文集「たけのこの兄」に掲載されている児童作文一〇三編の中から、その到達点を示すものとして、第四号所収の「ほんせんべいやさん」をとりあげ、考察を加えたい。作者は「学級革命」で「ボス退治」の中心的な役割りを果たした「細見勝郎」である。

「ほんせんべいやさん」の冒頭は、次のように書き出されている。

悟と二人で車をひいて、米つきに行くくと、製米所の横の製材所の前へ、いつもの、ほんせんべい屋さんに来ておられた。

「シューシュー」と機械から蒸気が吹き出して、甘いような、こぼばしいにおいがしている。僕が、「おじさん、今日は早う来とつてやなあ。」というと、おじさんは笑いながらいせいよく、「おう。」といわれた。ぼくらについて来ていた三義君が、「おいさん、こは、

ど、どこよりもよいなあ。」と、どもりもつていうと、おじさんは機械にスプーンで米を入れながら、「なんでよいや。」といわれた。

三義君が、「軒があつてよいわなあ。」というと、「わしら、雨ふりはあんまり来やへんわな。」といわれた。悟が「おじさん、一日中火にあたつとつて、暑いでないか。」というと、おじさんは、「あのう、何やのう、夏はかなんけど、冬は寒うのうて、よいわ。」と、焼けたせんべいを、先の平らなさじのような物で取りながらいわれた。ぼくが「こは、たき物がようけあつて、よいわな。」というと、おじさんは、「うん、こは、それだけがよいのう。」といわれた。悟が、「そんなもんで、せんべい取りにくいじゃないか。」ときくと、「おいさん、取るもん忘れて、これをあそこの家で借りてきた。」と、もくちゃんところを指さしながらいわれた。

方言を有効に生かした会話文によって、それぞれの人物が的確に描き出されている。

さらに、「せんべい屋さんが、機械をあけられると、せんべいは真黒になつて、煙が出ていた。おじさんは、頭を両手でおさえながら、「わあ、しもたことしたやれ。」といつて、大いそぎで、せんべいをとられた。『おいさん、作つとくれいうて、たのんどつてや人に叱られへんか』と三義君がいうと、『しゃないやれ、お前らの米はこんじゃつたもの、大勢にいうなよ。』と、又米を入れながら言われた。ぼくが「はあ、いわへん。」というと、三義君も、悟も、「はあ、せつたいにいわへん。」といつた。」という文章を経、おしまいの部分は、次のように描かれている。

ぼくが、「おじさん、よう、もうかるかあ。」ときくと、「何、もうかるいやい。」といわれた。「そのズルチンか、サッカリンかしらんけど、一袋なんぼや。」ときくと、「これか、目がむける程、たかいじよ。」といつて、なんぼともいわれない。「一日に、なんぼほどもうかつじよ。」というところ、こんどは、本気な顔になって、「日によつて、ようけのおりや、ちいとのおりやあるさかい、わからへん」といわれた。

「まあ、ちかごろ、ようもうかつたというのは、二・三日ぐらいや。」といわれた。三義君が、「おいさん、たばこすわへんのか。」ときくと、おいさんは、つわをこくりと飲みこんで、「のむけど、今日は、忘れたじゃれ。」と、横をむきながらいわれた。悟が、「今日は、何もかも忘れとつてやな。」というところ、「おう、おいさんは、忘れん坊でかなんじゃれ、そやから、学校は、ゆうとう生やった。」といわれた。

服も、首の手ぬぐいも、真黒になつてゐる。いつも帰る時は、くろい顔して、帰りよつてやが、もうからへん日は、かなんやろなあと思つてゐると、三義君も、同じことを考えていたらしく、「もうからへんたら、いんで、おばはんは、おこられへんか。」ときいた。「おこられへんわいや。」といわれた。

悟が、「うそや、おこられるやろ、百万円のかけしようか。」といつて、小ゆびを出し、右足を前へふみ出して、元氣よくいった。おじさんは、「わしら、百万円も持つたらへんさかい、十円のかけしようか。」といわれた。悟は、だまつて、頭をおさえて、おじさんの顔を見ていた。

せんべいは、もうだいぶやけて、箱に入つてゐる。ぼくは、面白のおじさんやなあと思ひながら、米をついてゐる方へ見に行った。

明るい表現の中に、明るさだけでは終わらせない、読む者の心をつつものを持つてゐる。ここにあるのは、単なる観察や描写ではない。「ぼんせんべいやさん」に対する作者の心よせと思ひやりが、全体を貫いてゐる。西尾実博士の「構想の五類型」にてらせば、完成段階「時間、空間が渾然としていて、事件が書く人の感情ともなり、象徴の力によって構想の力が発展していく」象徴的展開の段階にあるともできよう。

いま、文集「たけのこの兄」に掲載されてゐる児童作文一〇三編のうち、この「ぼんせんべいやさん」も含め、四七編（四五・六パーセント）が、この「象徴的段階」にあると考えられる。

文集「たけのこの兄」に掲載された一つ一つの児童作文が、常に学級集団の中でとりあげられ、話し合われることは、すでに考察してきた。したがつて、「たけのこの兄」の児童二六名の文章表現力を代表するものとして、この「ぼんせんべいやさん」などの作文が生み出されてゐるのである。

六

文集「たけのこの兄」は、そのための特別な編集形態をとる段階にまではいたつてゐないものの、「話し合い」をその中に含み持つ、独自の指導法の中に位置づけられていた。この「話し合い」によつて、「二年生程度」の作文を書いてゐた児童を、「象徴的展開」の段

階にまでいたらせたその指導は、注目に価する。

文集を中心とした話し合いによって、書くことが、また、のびのびと児童のほんとうの考えを展開させることが、可能となったのである。

文集指導の不振がいわれる現在、小西健二郎氏の素朴ないきかたの中に、改めて多くのことを学ぶことができよう。

△注▽

1・昭和三〇年九月二八日・牧書店刊。同書は、「毎日出版文化賞」を受賞し、また「戦後日本の良心的な教師の記録として、もっとも質のすぐれたもの」(田宮輝夫)と評価された。

2・「もうひとつのリアリズムから」小西健二郎、兵庫作文の会機関誌「作文運動」第九号(昭和二七年五月五日刊)一二ペ〜一三

ペ

3・『学級革命』前出 二二九〜二四〇ペ。

4・項目は日本作文の会編『生活綴方文例事典』(昭和三九年九月一日・明治図書刊)を参考に作成した。

・一〇三編中一四編(一三・六パーセント)以上を「多」、五編(四・八五パーセント)以下を「少」とした。

・項目によっては重複しているものがある。

5・『西尾実国語教育全集・第三巻』昭和五〇年二月二八日、教育出版刊。一三二ページ。

(武庫川女子大学講師)